

様式9 (事後・公表)

平成25年度 試験研究課題検討結果票 (事後)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
1	環境負荷軽減のための農業新技術確立研究事業—「ちばエコ農業」支援を軸とした新技術の確立と実証—	平成20～24年度	<p>本プロジェクトでは、慣行並みの収量・品質は維持しつつ、化学合成農薬や化学肥料を慣行の50%以上削減できる新技術及び環境に負荷を与えない有機質資材の適正施用技術を確立する。また、これまでに開発した技術を体系化し実証する。併せて、これらの取組みが環境に与える影響を評価する。以上の環境保全型農業に係る総合的な研究及び技術開発を行うことで、「ちばエコ農業」の推進を支援する。</p> <p>主要な成果は、以下のとおり。</p> <p>1)「ふさこがね」で、家畜ふん堆肥連用年数に応じた元肥及び穂肥の化学肥料削減法を明らかにした。</p> <p>2)低濃度エタノール土壌還元消毒で50cm深まで、トマト・キュウリのネコブセンチュウを防除できることを明らかにした。</p> <p>3)サツマイモの線虫防除には、対抗植物栽培後にベニアズマ、次にベにはるか導入が有効であった。</p> <p>4)ナン病害防除ナビ、複合交信攪乱剤等の組合せで、現地4園でちばエコ農産物の栽培を実証した。</p> <p>5)窒素肥沃度の高い圃場作土30cmまでの残存無機態窒素を施肥の8割に評価し減肥指針を示した。</p> <p>6)夏作ソルゴーと冬作エンバクでは溶脱窒素を最大20kg/10a吸収し、次作肥料として再活用できた。</p> <p>7)16品目・19作型で「ちばエコ農産物」栽培基準の栽培が可能であることを実証した。</p> <p>以上の取組をもとに、「ちばエコ農産物」品目別栽培カードを作成する等、行政施策を支援している。</p>	<p>(ア)コストと手間が増えたうえに、高く売ることができないのであれば、「ちばエコ農業」は、拡大しないと考えられる。</p> <p>(ウ)低濃度エタノール土壌還元消毒では、大量の水を使用するが、肥料が流失して地力が低下するのではないかと？</p>	<p>(ウ)今後の技術開発にあたっては、コスト削減への意識をさらに高めながら進めたいと思います。</p> <p>(ウ)堆肥を入れるなど、地力低下を防ぐ方法を検討しています。堆肥の効果を確認するには何年か継続した調査が必要であると考えます。</p>	4

検討評価は以下の番号を記入。
 5:計画以上の成果が得られた
 4:計画どおりの成果が得られた
 3:計画に近い成果が得られた
 2:わずかな成果しか得られなかった
 1:成果が得られなかった

様式9 (事後・公表)

平成25年度 試験研究課題検討結果票 (事後)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究計画の妥当性 (イ)研究成果の達成度 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
2	ナシ葉を加害するチャノキイロアザミウマの発生生態の解明と防除技術の確立	平成22～24年度	<p>チャノキイロアザミウマについては、他県のカンキツで圃場周辺植生からの侵入経路など生活史の一部が明らかにされているが、本県ナシ園における生態は不明である。このため、被害が多発しているナシ園及び周辺植生において被害状況及び本種の発生生態を調査する。また、本種の防除に有効な殺虫剤を明らかにし、防除対策を確立する。</p> <p>ナシ園では、越冬成虫が4月上旬頃に飛来し、6月下旬頃から密度が急激に増加し、8月中旬ごろがピークとなった。その後密度が減少し、10月下旬には発生が終息した。</p> <p>本種の越冬場所の一つは、ナシ園内の土壌表面近くであり、そこからの越冬後成虫の離脱は4月上旬頃に気温が20℃程度まで上昇した風の穏やかな晴天日に起こることを明らかにした。</p> <p>成幼虫の薬剤感受性検定やほ場における防除効果調査を行い、実用性が高い殺虫剤を明らかにした。これらの薬剤は、ナシにおけるチャノキイロアザミウマ(一部、アザミウマ類)防除薬剤として適用拡大された。</p> <p>慣行防除を実施しているナシ園において、低密度で发育ステージの揃った第1世代成虫を対象として、6月上旬に追加防除を行った結果、慣行防除のみの場合と比べ成幼虫寄生密度を3週間以上にわたって約1/10に抑制できた。</p>	<p>(ウ)アザミウマが樹体に着く前に、天敵のカブリダニが増えていくとい。カブリダニを増やす技術はあるか。</p> <p>(ウ)開発した防除技術を本当の意味で確立するには、実証試験が必要と考えられるがどうか。</p>	<p>(ウ)カブリダニが好む樹種をナシ園に植えることで対処する方法が考えられます。</p> <p>(ウ)実証試験は重要だと考えています。本課題の中でも、薬剤散布のタイミングについて実証試験を行いました。</p>	4

検討評価は以下の番号を記入。
 5:計画以上の成果が得られた
 4:計画どおりの成果が得られた
 3:計画に近い成果が得られた
 2:わずかな成果しか得られなかった
 1:成果が得られなかった

様式7 (事前・公表)

平成25年度 試験研究課題検討結果票 (事前)

課題No.	課題名	研究期間	研究概要 (目的・計画・予想される成果)	主な所見・指摘事項等		検討結果
				(ア)研究の必要性や重要性 (イ)研究計画の妥当性 (ウ)研究成果の普及性及び発展性 (エ)その他	指摘事項等に対する対応	
3	6次産業化を推進する千葉ブランド落花生生産システムの高度化	平成26～28年度	<p>開発が進んでいる収穫反転機や播種機を利用した機械化一貫体系を確立して省力的な栽培を可能にし、育成した高品質多収品種を利用した栽培技術を開発して、本県の特産的品目である落花生の生産から利用、販売戦略を含めた6次産業化に取り組むことで消費を拡大し、産地の維持振興を図り、輪作作物として園芸産地の栽培環境の優位性に貢献する。</p> <p>機械化の遅れている落花生栽培において、開発が進んでいる機械を組み込んだ機械化一貫体系を確立することで省力的な栽培体系を組むことができ、園芸産地でも輪作作物として落花生を取り入れやすくなる。また、落花生加工販売業者を核とした、機械の共同利用を目的とした落花生生産者の組織作りが可能になり、栽培面積の維持と耕作放棄地の拡大も抑制できる。機械化一貫体で生産された落花生でも、これまでのポッチ積み乾燥と同等な品質が維持できることから、千葉県ブランド落花生がより省力的な生産システムで供給可能になる。高品質多収品種を用いた省力多収栽培方法が確立することで、良食味落花生を値頃感のある商品として供給可能となる。需要拡大を目指した新商品が開発されることで、これまで贈答用のみ利用であった購買層にも、自分で利用する普段使いの落花生として新たな消費が拡大して、落花生の栽培面積の拡大が可能になる。</p>	<p>(ウ)落花生の需要を喚起するためには、千葉の落花生の「良い所」を明確にする必要がある。</p> <p>(ウ)落花生は播種や収穫に労力がかかるので、機械化を進めて欲しい。</p>	<p>(ウ)美味しさや成分などの特性に着目し、「良い所」を明らかにして行きたいと思います。</p> <p>(ウ)現在、収穫機の開発に取り組んでいますが、今後も機械化が実現するように取組みを進めて行きたいと考えています。</p>	4

検討結果は事務局が基準に従い以下の番号を入れる。

- 5: 独創性・貢献度等が高く、是非課題化の方が良い
- 4: 課題化の方が良い
- 3: 部分的に検討する必要がある
- 2: 大幅に見直す必要がある
- 1: 課題化する必要はない